

# 財団設立から85年、 「学ぶ、つながる、社会を変える」

野村 浩子

2026年、日本女性学習財団は財団設立から85周年を迎えました。新たなスタートにあたり、少し歴史をひもといてみたいと思います。

1937年、現在も拠点を構える東京・芝公園に、女子会館が完成しました。開館式の折の一葉の写真があります。会場に集まった和服を着た女性たちが、一心に前をみつめています。「我が国には未だ女性の抱負を表徴すべき何等の施設も、又修養の中心となるべき一の殿堂もない」（女子会館建設趣意書）として、地方から出てきた女性も安心して宿泊して学べる施設として誕生。女性たちの「学ぶ」拠点となったのです。その後、1941年に前身となる財団法人日本女子会館が設立されます。

長年の歴史のなかで、財団は「つながる」場でもありました。戦前から女性参政権運動に取り組み、戦後は政治家として活躍した市川房枝の記録をみると「日本女子会館での会合に参加した」という記述が散見されます。女性運動、市民運動を担う人が、集い、連携する拠点でもあったのです。

戦後を迎え、時代とともに財団の役割も変化を遂げます。1952年に『女性教養』（現在の『We learn』）を創刊。70年代に入ると、「国際婦人年」「女性の社会参加、女性の自立」といった特集も組まれるようになります。78年の同誌「巻頭言」で当時の塩ハマ子常務理事は「婦人は、自主性を磨き、政治や社会問題にもっと目を注ぎ、その改善のために活動する素地を、何とかして身につけなければならない」と述べています。女性は「社会を変える」主体であるということです。

財団ではいま、対面のみならずオンラインでも学び、つながりを広げています。社会を変える力にデジタルも活用していきたいと考えています。設立85年、時代の変化を捉えつつ「学ぶ、つながる、社会を変える」場として、変わらず歩み続けていきたいと思っています。



## PROFILE

のむらひろこ：(公財)日本女性学習財団理事長。お茶の水女子大学卒。日経ホーム出版社(現日経BP)発行の『日経WOMAN』編集長、日本初の女性リーダー向け雑誌『日経EW』編集長、日本経済新聞社・編集委員、淑徳大学教授などを経て、2020年4月東京家政学院大学特別招聘教授、2024年6月当財団理事長。財務省・財政制度等審議会など政府自治体の各種委員も務める。近刊『地方で拓く女性のキャリア』(光文社新書、2025)。